経験を学びに変える - 生活文化コースの取り組み 2 -

菊地 紀子·桜井 正·上 憲治 帝京短期大学

Turn the experience into the learning - The second attempt of The Life Culture Course -

Noriko KIKUCHI · Tadashi SAKURAI · Kenji KAMI Teikvo Junior College

Abstract

It was a problem that a student changes "the feeling that I am made to do". We worked to changes students by carrying on activity for own ploblem and situation of the local person. The area problem was organized in 3 projects (festival project, folwer project, "sasahatakko · sasahata café project).

The 1st purpose of this project system is area contribution for an area (development of region), and another is learning of the operation poser and the sociality for the student that we are thereby provided.

In addition, We report that We adopted "self-evaluation" and "a multifaceted evaluation" as a method of the evaluations.

Keywords: Person concerned consciousness, Project, self-evaluation, multifaceted evaluation

要旨

学生の"やらされてる感"を、当事者意識、地域目線での活動からの学修成果の勝ち取りとすべく地域課題タスクを3つのプロジェクト(お祭りプロジェクト、お花プロジェクト、"ささはたっこ"・"ささはたカフェ"プロジェクト) に編成した。プロジェクト制の目的は地域のための地域貢献(地域づくり)であり、もう1つはそれによってしか習得できない学生のための就業力や社会性の学修である。

また、評価の方法として「自己評価」や「多面的評価」を取り入れたことについて報告している。

キーワード: 当事者意識、プロジェクト、自己評価、多面的評価

1 はじめに

就業力とは、大学設置基準¹⁾によれば、「学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力」とされ、特に「生涯を通じた持続的な就業力の育成」は重要である。

先に示された文部科学省からの「短期大学の今後のあり方について」でも、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力や態度の育成を図ることが重要であると報告されている。

本学生活科学科生活科学専攻生活文化コース(以下 "生活文化コース")では、就業力向上のためのカリキュラムとして、図1のとおり「キャリアルート」という考え方に基づき、各自の興味・関心、将来設計を熟慮し、選択していくことができるカリキュラム構成である。

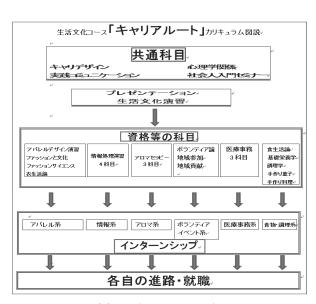


図1 キャリアルート

「キャリアルート」の基盤となる科目の一つである生活文化演習の中でチーム基盤型学習の一部を取り入れ、4~5人のチームを組ませ、チームワーク力やコミュニケーション力を高めるため、様々な活動を展開していた。前報²⁾では、生活文化コースで取り組んでいる様々な活動を、単なる経験で終わらせず学びに変えるには、どのようなことが必要であるか検討するため、生活文化コースで取り組んでいる様々な活動を洗い出し、参加する学生の姿勢や態度、提出物から学生の成長を観察、記録し報告した。

しかし、学生の当事者意識の希薄さが感じられ、"や らされてる感"が漂っており、積極的・主体的にボラ ンティア活動に参加する姿はなかなか見ることができ なかった。ここには大きな教育の課題が横たわってい る。例えばアクティブ・ラーニングの推進がその一例 である。生活文化コースの場合、学生の学びという目 的はもちろんであるが、それ以上に様々な地域活動に おいて地域への貢献が課題となっている。学生にとっ ては学びであるが、受け入れる地域にとっては今日の 売り上げで暮らしを守る地域づくりの戦力である。ま して地域づくりの妨げとなってもらっては大きな損失 であり、お断り願いたいのである。これが教育課程内 における実習科目との違いである。その実習において も苦情が寄せられることがあるが、後継者育成のため ということでご協力いただけているところがある。し かし、地域活動の場合は学修面は学生や短大側の都 合でしかない。就業力向上という課題にとってはアク ティブ・ラーニングとはこうした真剣勝負の展開に加 わる中で、結果的に学修成果を修得することである。 こうした地域の真剣勝負の自覚が学生において行き届 いていないところに"やらされてる感"や当事者意識 の不足という原因がある。

そこで、学生の当事者意識の気づき、つまり地域の身になった地域目線での地域貢献とそれによる就業力の学びを得るために地域課題タスクを3つのプロジェクト(お祭りプロジェクト、お花プロジェクト、"ささはたっこ"・"ささはたカフェ"プロジェクト)として編成した。プロジェクト制の目的は1つは自主的な活動の学びであり、もう1つは地域貢献(地域づくり)である。

これらの活動内容は長いものでは 15 年ぐらい継続 し、築き上げてきたもので、最近のものでも 3 年は継 続している。またボランティアの年間活動合計数は 100 回を超えている。従って学生はアドミッション・ ポリシーとして了解済みで入学し、カリキュラムポリシーとしても実際に学びに参加し、すでに学修成果を上げているところである。そこでこのプロジェクト制の理念の理解の指導が課題なのである。

また、評価の方法として「自己評価」や「多面的評価」を取り入れたことについて報告する。

2 研究の目的

本研究の目的は、生活文化コースで取り組んでいる様々な活動を、単なる経験で終わらせず学びに変えるには、どのようなことが必要であるかを明らかにすることである。

3 研究方法

生活文化コースで取り組んでいる様々な活動について、参加する学生の姿勢や態度、提出物から学生の成長を観察、記録する。

対象は、平成29年度生活文化コースの1、2年生66名である。なお、授業内で収集したデータは、個人を特定しない形で、教育改善に使用することがあることを書面で伝えた。

4 3つのプロジェクト

3つのプロジェクト(お祭りプロジェクト、お花プロジェクト、"ささはたっこ"・"ささはたカフェ"プロジェクト)は以下のとおりである。

1) お祭りプロジェクト

お祭りプロジェクトは、5月のせせらぎまつりに始まり、3月の春まつりまで、表1のとおり季節に応じたお祭りに参加するため、お祭りプロジェクトメンバーが中心となって計画、立案し、他のプロジェクトである。

2) お花プロジェクト

お花プロジェクトは、学内のお花の管理・植え替え、6号坂商店街のハンギングバスケットのお花の管理、植え替えを行っている。6号坂商店街の植え替えは、渋谷区の「渋谷おとなりサンデー」の一環として、ハンギングバスケット植え替え大会として実施している。お花の水やりは、他のプロジェクトメンバーの協力を得ながら進めていくプロジェクトである。

3) "ささはたっこ"・"ささはたカフェ"プロジェクト

渋谷区との「S - SAP協定」に基づく「渋谷区こ

表1 年間お祭り一覧表

月	名称	学生の活動
5	せせらぎまつり	模擬店の出店、ささはたカフェ出店手伝い
7	6 号通り商店街夏祭り	模擬店の出店、他出店手伝い
8	6 号坂通り商店街夏祭り	模擬店の出店、他出店手伝い
9	氷川神社例大祭	お神輿先導、模擬店の出店
10	ふるさとまつり	模擬店の出店、ささはたカフェ出店手伝い
	ハロウィン祭り	他出店手伝い、コンテスト参加
11	ふるさと渋谷フェスティバル	模擬店の出店
2	社会教育館まつり・文化祭	他出店手伝い
3	桜まつり、本町まつり	模擬店の出店

どもテーブル」の"ささはたっこ"、渋谷区社会福祉協議会と共催の"ささはたカフェ"に参加している。参加メンバーは、他のプロジェクトメンバーの協力を得ながら進めていくプロジェクトである。

5 評価方法について

成績評価については「経営学」³⁾を拠り所として構築した。経営学では人間の協働を研究対象としている。バーナード(C.I.Banard)が定義する「2人以上の人々の意識的に調整された活動ないし諸力のシステム」である組織は、共通目的、協働意思、コミュニケーションという3つの要素があるときに成立するとしている。

評価方法は、「自己評価」と「多面的評価」を導入した。表2、表3の通り2種類の「評価表」シートを準備し、前期・後期の期末に学生自身が参加した地域貢献ボランティア活動及びその準備段階であるプロジェクト会議などについて自己洞察をおこない、まずは学生が自己評価をする。そして考課者として教員が段階的に評価を加え、所見を記入し、評点を付与する。評価要素としては大きく3つの要素からなる。「成果評価」「能力評価」「意識評価」の各項目を配置し、「評定着眼点」に基づき、自己評価点を選択していく。

次に多面的評価であるが、「地域づくり」に取り組む地域貢献ボランティア活動はより暮らしやすい地域をつくるために、様々な地域ニーズを習得することによって活動を高度化させていくと考える。そのためには、こどもからお年寄りまでの地域住民とのコミュニケーション、タスク別学生プロジェクト内のコミュニケーション、そしてプロジェクトをまとめ、「意思決

定」をしていく過程でのリーダーシップの役割に注目 し、多面的評価をおこなった。

6 研究結果及び考察

1次考課、2次考課制度とした。1次考課については、専任教員の3人が独自で評価点を付け、2次考課については学生に成績を付与する主担当の教員がおこない、最終評価点とした。自己評価と考課者の点数に極度の乖離がある学生については、面談のうえ、評価点を決定していく。ハイコンテクスト文化の高い日本人ゆえか、多数の学生が自己評価点を低めに設定する傾向がみられた。課題は自己評価点が高いが、考課者の評価点が低い学生への対応である。評価は能力開発に主眼を置くため、フィードバックを個人面談でおこなっていくことが次年度の課題であると考える。

7 おわりに

3つのプロジェクト(お祭りプロジェクト、お花プロジェクト、"ささはたっこ"・"ささはたカフェ"プロジェクト)に分け、PDCAサイクルを廻し学生リーダーが主体となって運営していく方法に切り替えたことで、学生の当事者意識の希薄さが少しは払拭され、"やらされてる感"も少しはなくなり、積極的・主体的にボランティア活動に参加することを期待された。各プロジェクトでの温度差はあるが、先ずリーダーや幹部については格段の成長がみられ、それぞれの担当イベントはリーダーを中心に学生の自治制が高まったと評価している。

しかし他の学生にうかがわれる当事者意識の希薄さや"やらされてる感"は、むしろ学生の自覚の問題と

いうより、活動の意義や目的などの理解不足に起因していると分かって来た。これはむしろ教員の側の課題であると思われる。

現段階ではプロジェクト内にグループとグループ長を設け、プロジェト・リーダーを中心とするグループ 長会議によって全員で取り組める組織作りを工夫した いと考えている。

本学の建学の精神は、創立以来「礼儀、努力、誠実」である。この姿を体現することで、本学のある地域に受け入れられ、学生が活動することによって、地域の活性化に繋がり地域貢献となって、ますます発展していくことになると考える。

(参考文献)

- 1) 大学設置基準、平成22年2月改正、平成23年度施行
- 2) 菊地紀子・桜井正・上憲治、経験を学びに変える -生活文化コースの取り組み1-帝京短期大学教 育研究報告集、5、3-8、(2017年)
- 3) 上野恭裕·馬場大治、『経営管理論』、中央経済社、 63 - 64、(2017年)

表 2

2017(平成 29)年度前期「生活文化演習」自己評価表

学籍番号(\ r b /	\
/ ラ /生出 大 / /)氏名(
T X T T T) () ()	

評定要素		評 定 着 眼 点	評価	E (k	点数に	_O &	とつし	ナる)
	参加したボラ	・ (月日)	S	A	В	С	D	Е
成	ンティア活動	・ (月日)	10	8	6	4	2	0
果	を記述	・ (月日)						
評	(箇条書き)	・ (月 日)						
価	業務達成度	・与えられた(自らの)業務を充分にこなし、所定の成果	S	A	В	\mathbf{C}	D	Е
		を挙げているか	10	8	6	4	2	0
		・所定の時間内にスピーディーに業務を処理しているか						
	活動を通して		S	A	В	С	D	Е
能	地域を良くす		10	8	6	4	2	0
	る、役にたつ							
力	意欲や気持ち							
評	について記入							
価								
	活動を通じ		S	A	В	\mathbf{C}	D	Е
	た課題点		10	8	6	4	2	0
	(箇条書き)							
	自発性	・自分の意思で活動したか	s	A	В	\mathbf{C}	D	Е
意	主体性	・常に前向きに活動を捉え積極的に業務を遂行しているか	5	4	3	2	1	0
識	使命感	・高い意識を持って業務を遂行しているか	S	A	В	\mathbf{C}	D	Е
1	責任感	・自身の仕事に責任感を持っておこなったか	5	4	3	2	1	0
評	無償性	・代償を期待せず、相手のニーズに応える活動をしたか	S	A	В	\mathbf{C}	D	Е
価		•	5	4	3	2	1	0
	連帯性・コミュニ	・チームワークを念頭に明朗快活に業務を遂行しているか	S	A	В	\mathbf{C}	D	Е
	ケーション力	・先輩として後輩の模範となったか(2年生の場合)	5	4	3	2	1	0
S=抜群の成績を達成 A=期待を上回る成績を達成				計占	与粉			
B=期待レベルの成績を達成 C=努力を要する結果となった 合計点数								
D=格別の努力を要する結果となった E=ゼロ評定								

※その他、記述したいことがあれば、裏面に記載

考課者	評 価 所 見	評点	評点者印
桜井先生			
菊地先生			
上先生			

※評定所見は教員使用

表3

2017(平成 29)年度(前期) 「生活文化演習ⅡA」評価表

(学籍番号)

(氏 名)

1.	学習内容に	こついてお答	答え	<	だ	さ	V	١,
----	-------	--------	----	---	---	---	---	----

(2) より適切な意思決定のためには何が重要だと考えますか。
(2) より適切な意思決定のためには何が重要だと考えますか。
(3) リーダーの役割とはどのような役割だと考えますか。また、そうした役割を果たすために、どのような知
識や能力が必要だと考えますか。
(4) あなたが担当した業務を効果的におこなっていく上で、どのような知識や能力が必要だと考えますか。

2. あなたのチーム及びあなた自身についてお答えください。

2. 00.272	一人人しゅうよん	- 日分に ブバ てわ合んてたさ	V '0		
(1) あなたはチ	ゲームの中で、	どのように貢献したと考え	ますか。		
(2) あなたが十	一分に貢献でき	なかった点はどのような点	ですか。		
(3) あなたのチ	ームメンバー	-について、 <u>あなたを含めて</u>	それぞれの貢献度	を、最も	貢献した場合を 5、最も貢献
が不十分だった	場合を1とし	<u>て、評価</u> してください(絶対	付評価)。		
氏 名	貢献度	理由	氏 名	貢献度	理由
あなた自身			さん		
さん			さん		
さん			さん		
さん			さん		
さん			さん		
さん			さん		

3. 他のチームのメンバーついてお答えください。

各チームについて「この人は優れている、頑張っていた、機会があれば一緒に働きたい」と思う人を上げてください。特にいない場合は、「該当者なし」としてください。

プロジェクト名	
お花 PJ	
お祭り PJ	
カフェ・食堂 PJ	